

葬儀の機能

— 集団精神療法の視点から —

The Function of Funeral – From The Point of Group Therapy

中 谷 智 一*

要旨

日本で行われている葬儀には、集団精神療法の視点から見ると「共有」「洞察」「カタルシス (catharsis: 浄化)」などの機能があり、これらの機能が葬儀を単に儀礼に終わらせず、或る意味で社会に必須のものたらしめていると考えられる。このことを具体的な事例から明らかにしようと試みた。

Abstract

From the point of group therapy, funerals in Japan have the function of “sharing”, “insight”, and “catharsis”. Their functions make funerals not merely ritual, but essential for the society. The author tried to clarify the thesis from the actual cases.

キーワード：葬儀 (葬式) / 集団精神療法 / 喪の作業 (mourning work)

1. はじめに

年頭に姻族の葬儀に参加する機会があった。普段は年賀状や電話などだけの付き合いであった方々が参列され、死者を悼んだ。その折に「これは集団精神療法に近いものがある」と感じ、調べてみた。その結果、やはり葬儀には集団精神療法と近似の機能があることがわかったので以下に報告する。

2. 葬儀の定義

まず、葬儀 (葬式) の定義を確認した。いろいろな人がそれぞれの観点から葬儀 (葬式) について定義を試みている。日本民族宗教辞典 (佐々木宏幹 et al 編 1998) では「死体の処理にともなう一連の儀礼。ここでは主に近現代の葬式をさす用語として用いる。葬儀は死者の靈魂の安定と残された生者の社会関係の再確認の二つの機能を持

つ。日本の場合、死亡後通夜に始まり葬儀 (式) を経て、土葬・火葬などの一時的な処理の終わった時点までを広く葬儀と呼ぶことが出来る」とし、二つの側面 (死者の靈魂の安定・生者の社会関係の再確認) について述べている。しかし、世界大百科事典 (下中直人編 1988) では「葬送儀礼。日本ではソウレン (葬礼) とかノオクリ (野送り) と呼ばれる。一般に死の発生から埋葬や火葬などの死体処理までの儀式を葬式と呼んでいる。葬式の様相は別項 (葬制) に記述にみるように各時代各地域によって多様であり、複雑である。したがって、日本だけとってみてもその典型的なやり方というようなものを説明するのは不可能である (以下略)」と書かれており、生者についての視点は見られない。同様に郷土史大事典 (歴史学会編 2005) でも「死者を弔うために行われる儀式 (礼)。一般的には通夜と告別式を指して用いることが多いが、死者の靈魂を送る儀礼と捉えて弔い上げまでを含む長期間に及ぶものとする考え方もある。早々の儀礼は時代や地域によって様々な内容が見

* NAKATANI, Tomokazu
北陸学院短期大学 食物栄養学科
学校カウンセリング基礎論

られ、複雑な様相を示している」とあり、ここでも生者に関する記述はない。葬式の際の人々の動きについては、「葬式組」の項に「葬儀の執行には近隣・同族・親類・友人など、死者の出た家をめぐり各種の社会関係が関与するが、そのなかで葬式組は葬儀の裏方をもっぱら担当する」とあり、具体的な業務の内容や作業について記述がなされている。また、近隣社会・地域社会の崩壊に伴い、地域での葬儀（葬式）が出来なくなり、葬儀社がその役割を担い始めた旨の指摘も見られるしそれはその通りではあるが、残された親族がどのように葬儀を体験するか、については筆者が調べた文献を見る限り見られなかった。

なお、「儀礼」については、以下のような見解があった。「人間の儀礼的行動はサリー・F・ムーアとバーバラ・マイヤー・ホフによれば、以下のような特徴がある。(1) 繰り返し行うものであること。(2) 意識的におこなうものであること。(3) 『特別の』行動ないスタイルを持つ。(4) 秩序だったものであること。(5) 喚起的で顕示的なスタイルを持つ(演じる)こと。(6) 『集合的』次に属すること(以下略)」(青木保 1984)

また、同書には「M. グラッグマンによる儀礼と儀式の区別」という文言も見え、そこには「儀式 ceremonial の一般的な領域において「儀礼 ritual」を「儀式 ceremonious」から区別するのは次の点である。「儀礼」はしばしば「儀礼的行動 ceremonious action」と見てはいるものの「神秘的観念」を持つ行動という特徴を付加されていることである」(青木 同書 p.31) この視点で葬式を見ると「儀礼」に分類されるようである。

3. 葬儀の流れ

これまでに筆者の経験した葬儀の流れは概ね以下のものであった。

- (1) 定められた時刻の前から、三々五々親類や縁者が集まり、互いの出席を確認したり、病死を看取った家族をねぎらい、死者を悼む。
- (2) 僧侶が来て読経し、その後「法話」と称し、死についてどのように考え、位置づけるべきかを参列者に述べ伝える。
- (3) 家族から順に焼香し、次に焼香する参列者の挨拶を受ける。

- (4) 遺族を代表し、喪主が参列者に対して参列の感謝を述べる。

ここまでは通夜も告別式も同一である。通夜の場合、別室(同室の場合もあるがここでは筆者の経験を述べる)に移り、遺族・参列者が酒食を共にし、死者の思い出などを語り合う。告別式の場合、出棺→火葬→骨上げと続き、遺骨を前に遺族・参列者が酒食を共にする。

基本的にはキリスト教式の葬式でも同様の流れであろう。ここで筆者が注目するのは遺族・参列者が互いの出席を確認し、家族をねぎらい、酒食を共にすることである。

4. 集団精神療法の key point

近藤ら(近藤 et al 2005)によれば、集団精神療法の何が治療的に働くか、は(1) 転移、(2) カタルシス、(3) 洞察、(4) 現実検討、(5) 昇華(Slavson .Sによる)、あるいは(1) 他人にわかってもらえた、(2) 自分ひとりが悩んでいるのではない、(3) 人の振りを見て自分の問題について学ぶ、(4) 具体的な説明や示唆を受ける、(5) 集団全体の無意識が活発になる(Foulkes, S. H.による)とある。また、同書のYalom, I.によれば(1) 他の患者がよくなるのを見て、自分も、という希望を持つ、(2) 自分ひとりが悩んでいるのではない、(3) 情報の交換、(4) 他の患者を助けて、自分が役に立っている経験をする、(5) 自分の家族の中で体験したことの繰り返し、(6) 人付き合いが上手になる、(7) 人の真似をしながら自分の行動を変える、(8) 対人関係から学ぶ、(9) グループがばらばらにならない、(10) 語ることによって重荷を下ろす、(11) 究極的には人は自分ひとりで現実と対決し、責任をとる、とされている。

5. 葬儀(葬式)と集団精神療法とのすりあわせ

3.で筆者は「遺族・参列者が互いの出席を確認し、家族をねぎらい、酒食を共にする」ことに注目する、と述べた。前記のこの場で何が行われているのであろうか。

参列者の主だった者(significant others)は遺族にとって、どのような経験をしてきた人なのかは周知・既知の事である。「あの人が来てくれた」「こ

の人が来てくれた」は、それだけでも遺族にとっては悲しみの共有が既になされ始めていると云って良い。精神科治療では（学生相談でも同様であるが）診察室（相談室）に来たことが既に治療の始まりである、とはよく云われることである。（〇〇という経験をした）あの人が（時間とお金をかけて）来てくれたのである。その人が遺族一人ひとりをねぎらってくれている。また、その人が酒食を共にしながら思い出話や自分の経験を語ってくれる。これは上記の「自分ひとりが悩んでいるのではない」や「人のふりを見て自分の問題について学ぶ」に相当するであろうし、共に語り合うことで「他の人にわかってもらえた」「語ることによって重荷を下ろす」に該当するのであろう。いろいろな人が自分なりに立ち直っていく姿を見ることは「他の人がよくなるのを見て、自分も、という希望を持つ」事につながると考えられる。加えて、酒が入ることで座が一種の「退行状態」になり、日常レベルではない、或る意味で深い部分の感情の交流や見解の交換が可能になる、と考えることができよう。問題をかかえた家族成員間、或いは複数の家族同士で行われる家族療法（集団家族療法）では、通常の社会的制約を超えた感情的吐露や生の感情の表出がしばしば見られ、そのことが治療的効果を高めている場合がよくあるが、葬儀（葬式）の中でのアルコールに力を借りた感情的な表出もまた、成員間のダイナミズムの調整に役立っている場合があると考えられる。

6. スムーズな「喪の作業（悲哀の仕事 mourning work）」への誘導

この項の小見出しに挙げた「悲哀の仕事（mourning work）」とは、「愛情や依存の対象や暮らした社会的・人間的環境などの喪失別れを対象喪失という。対象喪失に伴う悲哀の心理的過程とフロイト（Freud, S）は呼んだ。（中略）失った対象に対する思慕の情を最終的に断念し、対象に対する備給を解消する過程が悲哀の心理過程であり、その心的な作業が悲哀の仕事である」（加藤 et al 2005）とされている。

この遺族と参列者同士の語らいは通夜・告別式では終わらず、四十九日（納骨）や新盆、三回忌、五回忌…と続いていく。ここでも遺族は、先

に家族や親しい人を失った先輩から話を聞いていくのである。これらは「大切な人の喪失は決してなかったことにならず、自分自身としてどのように受け止め決着をつけていくのか」について学ぶ機会となる。これは前記4.の（11）「究極的には人は自分ひとりで現実と対決し責任をとる」事と対応していると考えられる。町沢（2000）は「我々自身も悲しみを癒すには、同じ仲間との感情の交流が一番重要なことだと思っています」と述べている。これも葬儀に参列した親族との語らいや、集団精神療法の患者仲間とのかかわり（peer counseling）の重要性を指摘していると考えられるのである。

7. おわりに

以上、筆者の経験した日本の葬儀（葬式）は集団精神療法のかなりの部分と合致し、遺族・親族の喪失体験にとって分かち合ったり、自分達だけではないことを示したり、わかってもらえたり、語ることによって重荷を下ろすことが出来たり機能、更には「喪の作業（悲哀の仕事 mourning work）」へのスムーズな誘導がなされたりしていることが明らかになったものと思われる。家族の機能（絆）が失われてきた、との指摘があちらこちらでなされている昨今、葬儀（葬式）という「喪失を受け止める社会装置」がそれなりに命脈を保っているのは、それだけ「死」の存在が大きく我々にのしかかっている、結局のところ最後はそれぞれ1人で決着を付けるにせよ、当初は家族や親族の力が必要で、協同で対処しなければ「死」の衝撃・重さには1人では到底太刀打ちできない、と云う事なのだろうか。日常生活を振り返る一助としてみたい。

<引用・参考文献>

- 1) 青木 保 1984 儀礼の象徴性 岩波現代選書
- 2) 石川栄吉・梅棹忠夫・大林太良 編 1997 文化人類学事典
- 3) 柏木哲夫 1985 人と心の理解－精神神経医のアプローチ いのちのことは社
- 4) 加藤正明 編 2005 新版 精神医学事典 弘文堂
- 5) 亀口憲治 1997 現代家族への治療的接近 ミネルヴァ書房
- 6) G. ゴーラー 宇都宮輝夫 訳 詩と悲しみの社会学 ヨルダン社

- 7) 近藤喬一・鈴木純一 編 集団精神療法ハンドブック 金剛出版
- 8) 齊藤 学 2007 家族パラドクス 中央法規
- 9) 佐々木宏幹 et al 編 1998 日本民族宗教事典 東京堂出版
- 10) 下中直人 編 1988 世界大百科事典 平凡社
- 11) 下中 弘 編 1993 日本史大事典 平凡社
- 12) 精神科臨床サービス 2003 3巻3号 星和書店
- 13) 福田俊一・増井昌美 1999 過食・拒食の家族療法 ミネルヴァ書房
- 14) 増井武士 1994 治療関係における「間」の活用 星和書店
- 15) 町沢静夫 2000 精神科医町沢静夫の心がラクになる本 海竜社
- 16) 山口 隆・中川賢幸 編 1992 集団精神療法の進め方 星和書店
- 17) 歴史学会 編 2005 郷土史大事典 朝倉書店